# あこのありが豆腐

## ～白い舟～

脚本：万葉

P.21～25

## 登場人物

原田修司・・・劇作家。

原田弥生／若きあこ・・・修司の娘。

原田千紗・・・修司の妻。

原田和乃（かずの）／ゆかり・・・修司の母／常連客。

洋（よう）ちゃん・・・修司の劇団時代の友人。

磯崎・・・常連客。

襃主（ほろぬし）・・・常連客。

川澄・・・常連客。

すず／あこの母・・・常連客。

しげ・・・常連客。

十蔵・・・常連客。

あこ・・・豆腐の行商。

弥生と修司の声

弥生　お父さんは忙しいからさ、せめて私くらい、顔見せたいんだ。

修司　本人に会わせろよ。それが一番早い。

## 第四場：川澄さんの取材

居酒屋『大入』。

意気揚々と喋るすずとしげ。修司は、面倒くさそうにメモをとっている。

すず　最初ね、「なんだこの子」って思ったわけよ！二十歳そこそこの娘がリアカーなんか引いて、ラッパ吹いてるんだから！

しげ　あたしなんか最初、選挙カーかと思った。

すず　あらやだ！豆腐で当選するわけないでしょ！

しげ　しちゃうかもよぉ？お豆腐で、ご当選！

すず　ちょっと、しげちゃん、うまいじゃない！

二人、大爆笑。

修司　声でかいなぁ…。

すず　（聞いておらず）え？なに？

修司　（繕って）いや、あの…お二人は、仲良しなんですねぇ。

しげ　いやいやそんなでも

すず・しげ　ないわよ！

修司　…。

しげ　私たちがおしゃべりするのなんて、あこちゃんが来るときだけよ！

すず　週に一度かな。

しげ　週に一度よ。

すず　だから嬉しいの。

すず・しげ　（謎のハイタッチ）ねー！

修司　あこさんがリアカー引き始めた頃の話、聞かせてもらえます？

すず　ああ懐かしい！まだリアカーにパラソル付いてなかった頃よ。毎日毎日「買ってくださーい！」

しげ　「おいしいですよー！」

すず・しげ　（謎のハイタッチ）ねっ。

修司　（呆れながら書き）…。

すず　雨の日なんてビッショビショ！かわいそうだから、思わず一丁買っちゃったのよ。

しげ　これぞ、清き一丁！

すず　選挙じゃないっての！

しげ　雪の日なんか、家の前まで押してきてくれるのよ？あれは助かったわあ。

修司　そこまでして売るなんて…必死だったんだな。

すず　そりゃ必死よ！商売だもの！

しげ　でもね、だんだんそれだけじゃなくなった気がするの。…きっと、あの子を変えたのは、川澄さんの存在だったんじゃないかな。

修司　川澄さん？

しげ　あこちゃんの、最初の常連客よ。

回想へ。

川澄　よーぅ、来たか。

若きあこ　こんにちはー。

川澄　お豆腐屋さんなのに、いろいろ積んでるんだな。漬物に油揚げ…惣菜まで。

若きあこ　お豆腐だけじゃ儲かんないから（と言いかけて）川澄さん！これ、信州のお蕎麦です！おすすめ！

川澄　うまいのか？

若きあこ　まだ、食べたことないですけど…美味しいですよ。多分、絶対！（上目遣い）買ってくれたら、晃子、嬉しいっ！

しげ　（回想を見ながら）見てこの首の角度。立派な商人ね。

川澄　俺はあきちゃんのそばにいたい。そばだけに。

すず　（爆笑）そばだけに！そばだけに！！（二人で大爆笑）

修司　そんなに？（ペンをカチカチしながら一瞥）

回想。夏。蝉の鳴く音。

川澄　よーぅ、来たか。

若きあこ　川澄さん！今日も待っててくれたんですね。

川澄　調子はどうだい？

若きあこ　…さっき、「プープーうるせえんだよ！」って怒鳴られちゃって…。

川澄　俺は好きだけどなあ。あの音。昔聞いたラッパみたいで懐かしいよ。でも今は、あきちゃんの音がしてる。

若きあこ　そう、ですか…。

川澄　暑いなあ。アイス、食うか？

若きあこ　えっ、いいんですか？

川澄　頭冷やして、頑張れよ。

若きあこ　…はい。

すず　（若きあこに向かって）この子…あこちゃんに似てないわね。

修司　（いらついて）ご本人にお会いしたことがないので、想像で補ってるんです。

しげ　（若きあこに向かって）あこちゃんに似てないってだけで、あなた美人さんだからね！すずちゃん悪気があって言ったわけじゃないから！

回想へ。冬。

川澄　よーぅ、来たか。

若きあこ　川澄さーん！はい、これ！

川澄　これは？…あ、ねじりん棒だ！

若きあこ　ドーナツだって！食べたいって言ったでしょ？駅前のパン屋にあったの。

川澄　覚えててくれたのかぁ。ありがとう。

ゆかりの声　（袖から）あこちゃーん！

若きあこ　行かなきゃ、じゃあね！

川澄　はい、これ。

若きあこ　ホッカイロ？こんなに…。いいって。

川澄　あきちゃん。頑張れよ。

若きあこ　…ねえ。今度から、リアカーに積んでないものがあったらなんでも言ってね。代わりに買ってくるし。

しげ　（ナレーション風に）そうして晃子は、次第に、川澄おじいちゃんに、商品を売ることよりも、どうしたら喜んでもらえるかを考えるようになったのであります。

すず　やだしげちゃん上手！声優さんみたい！

しげ　でしょ！！あたし実は（などと続ける）

修司　（遮って）で、その川澄さんは？

短い間

しげ　随分前に、旅立ったよ。

修司　…そうですか。

しげ　あこちゃんが話してた。ある時、川澄さんと一緒にいて、「明日の仕込みどうしよう」って仕事のことばっかり考えてたんだって。

すず　うんうん。

しげ　帰る際にね、川澄さんがいつも通り「ありがとう、頑張れよ」って。

すず　あの人の口癖ね。

しげ　で…数日後よ。ヘルパーさんから電話が来たの。川澄さん、脱水で倒れて、そのまま…。

すず　急だったのよね。

しげ　「今日までしか家にいない」って聞いて、あこちゃん慌ててリアカー片付けて、駆けつけたのよ。息子さんやお孫さんと一緒に囲んで、思い出話して。…もう会えないって分かってたら、もっと話したかったって…

修司　もう結構です。

しげ　え？

修司　ありがとうございました。

しげ　でも、まだ…

修司　（メモをとりながら）結局人は、老いて死ぬ。それだけのことでしょう。

すず　は？今、なんて言った？

しげ　「それだけ」って…。

修司　ありきたりで、舞台で描くには弱いってことです。

間

しげ　あんたね、この前の原稿、読んだよ。

修司　え、なんで、あいつ送ったんですか？

しげ　磯崎さんが息も絶え絶えで、あこちゃんが泣きながら抱きしめただの、最後の頼みを聞いただの…！歌舞伎の口上みたいにあることないこと並べて…！だいたい、「海辺のコテージ」って何よ！木造の一軒家でしょうが！

修司　物語として演出しただけです。

しげ　それは、あんたの都合だろ！

間

しげ　磯崎さんは、安らかに眠ったんだ。それを「感動の名場面」に仕立てて…。

修司　あなた方に、舞台はわかりません。

しげ　それが、あんたの商売かもしれない。でもね…。

すず　磯崎さんを知ってるあたしたちには、たまらないよ。

間

すず　あこちゃんのこと、磯崎さんのこと、川澄さんのこと…。ちゃんと書いて欲しい。

しげ　だから、あたしたちは今日ここに来たんだよ。

修司、言葉に詰まる。そこへ千紗がそっと器を差し出す。

千紗　（差し出し）これ、どうぞ。

修司　…後にしてくれ。

千紗　豆乳プリン。初めて作ったんです。

修司　…豆乳、って…。

千紗　…あこさんから買ったのよ。笑顔でありがとうって、言ってくれた。

修司　…。

照明変化。電話の音。